

国士館の思い出

我が青春・国士館中学校時代の思い出

旧制国士館中学校二〇期生 間宮 勇



私は一九二九（昭和四）年生まれの八六歳。戦前、戦中、戦後と激動の世界を生き抜いてきた男である。

青春時代の大半は国士館中学校の一年から四年まで、まさに意気軒昂であった。友人たちとは日本の将来を語り、自分の人生について論じあったものである。

学校の理念である「誠意、勤労、見識、気魄」を頭に叩きこみ、ただひたすらに頑張つてこられたのも、この理念を忠実に守り通してきたおかげだと思っている。

七〇数年前の記憶は曖昧である。しかし、戦時中の記憶は不思議に覚えている。

連戦連勝から次第に押され気味となった日本、この時代を背景に私の中学時代が始まったのである。

二〇一四（平成二六）年の六月頃だったと思う。六〇年ぶりに世田谷キャンパスを訪問した。戦後一度も訪れなかった母校がどう変わったのか、懐かしさと期待に胸を躍らせて校門をくぐった。近代的な校舎が建ち並び、そこには明るい表情で談笑している学生たちの姿。このような環境で学問が出来る若者たちは何と幸福なことか、羨ましいかぎりであった。

学生たちと話をしていると、一瞬眼に入ったのが、その雰囲気にもそぐわない、近代的な校舎とは対照的な、いかにも重厚な建物だった。「そうだ、大講堂だ」、その瞬間、私は七〇数年前の中学時代の思い出が走馬灯のようによみがえった。

三人兄弟のうち、兄、弟は新大久保にあった「東京保



大講堂外観（昭和 18 年 3 月 中学校卒業アルバムより）

善商業学校」（現保善高等学校）に、私は軍人になりました。国士館中学校に入学した。

詰襟の制服にゲートルを巻き、白いカバンを肩からぶら下げ、軍人気どりで勢いよく家を飛びだした記憶がある。

京王線「笹塚」駅から「下高井戸」駅で「玉電」（現東急世田谷線）に乗換え、「松陰神社前」駅までの通学だった。

当時の玉電は、今という昭和初期の「チンチン電車」である。乗降場所は鎖でつながれ、その鎖をはずして客室に入るのだが、私はそのままデッキに立ち、運転手さんと一緒に通学した覚えがある。

「下高井戸」駅から「松陰神社前」駅までの車窓は家もなく、ただ畑ばかりの田園風景だった。夏は心地よい風に吹かれ、何ともいえない気分がひたつたものである。

私が国士館に入学した昭和一七年頃、日本は連戦連勝から押され気味となり、国内は緊張した空気に包まれていた。

こうした雰囲気の中、一年生の私などは学校に着くまでが大変だった。上級生に会えば敬礼、先生とも会え

ば敬礼のまま、姿が見えなくなるまで見送らねばならなかった。まさに緊張の連続だった。

洋館風の木造校舎は古びていたが、正門入口の部屋は多分職員室だったと記憶している。なお、校舎が土足厳禁ということはなかったと思う。当時は、編上げ靴の上からゲートルを巻いていたが、靴の脱ぎ履きが面倒くさかったという思い出はまったくない。

校舎に沿って長く広い運動場、まわりは緑に包まれていた。朝礼はそこで行われた。

柴田徳次郎館長を先頭に、柴田梵天副館長、口髭を左右にピンとはねあげた初老の陸軍中佐が乗馬姿で乗り入れ、それに諸先生方が徒歩で続いた。

口を真一文字に結び、「頭なか」の号令に館長は拳手の礼で答えた姿が今でも脳裏に焼きついている。

柴田館長の訓示は、日本の将来についてではなかったかと思う。その声は張りがあり、広い校庭に響きわたった。

校地には、大講堂を中心に剣道場・柔道場があり、そのなかで目を引いたのが厩舎である。数頭の馬がいたと思うが、上級生の手によって清掃されていた。厩舎独得

の臭いが私にとってたまらない魅力であった。この馬は柴田徳次郎館長、柴田梵天副館長はじめ、配属将校先生らがお乗りになる馬である。授業終了後、厩舎を訪れて馬と会話するのが楽しみのひとつであった。

そんなこともあって、しばらくたった或る日に上級生から「お前は何の部に入りたいか」と聞かれた際、私は迷うことなく「乗馬部」と答えたが、まったく相手にされなかった。身長一五〇cm以下では当然だろうと思った。「ならばラッパ部はどうか」と云われ、しぶしぶ入部したのが「音楽部」であった。授業を終えて仲間五人と猛特訓がはじまった。やがてその成果が実を結び、〆秋の大運動会〆で競技開始のラッパを高らかに吹奏したのである。柴田館長はじめ多数の父兄が見守るなかであり、その感激は今でもわすれない。

このほか、学校が最も力を入れていたのが「剣道」と「柔道」である。

寒稽古と称し、全員が寮に入り、夜中の三時頃から稽古に入るのである。冷えきった剣道場の板の間は氷のようであった。しばらく正座して精神統一をはかり、稽古に入るのだが、その間、トイレにも行かせてもらえないほどの厳しいものだった。

夜がしらじらと明ける頃、稽古が終了。出された朝食

がうまくいったこと。はげ落ちた木の弁当箱に入っていたのは雑炊のようなものだったと記憶している。

今でも思い出されるのは諸先生方である。お名前は記憶していないが、ニックネームだけは不思議に覚えている。「ターザン」（注―大野光起・体操）、「びわだる」（注―氏名不詳）のお二人。いずれも屈強なお身体であった。授業も厳しかった。私が教科書を忘れた日、あいにく担当は「びわだる」先生であった。「やられる」と思った瞬間、ビンタを喰らった。だが五本の指ではなく二本の指であった。痛さは感じなかった。先生の思いやりではなかったかとも思っている。

印象に残っている先生がもう一人おられる。背の低い、どこか病弱のようにみえた国語の先生（注―氏名不詳）だが、その反面、授業はとても厳しかった。いつも咳をしており、笑った顔を見ることがなかった。今でもその表情が忘れられない。ただ、一步教室を出て、廊下などでお会いすると、非常に優しい態度で私に接してくださった。

これは私の推測だが、私の父間宮直香の兄が間宮茂輔という作家で、代表作『あらがね』は芥川賞にノミネートされたほど評判を呼んだ作品であったこともあり、国

語の先生が私と伯父茂輔の関係をご存知であったのかも知れないと、思うことがあった。

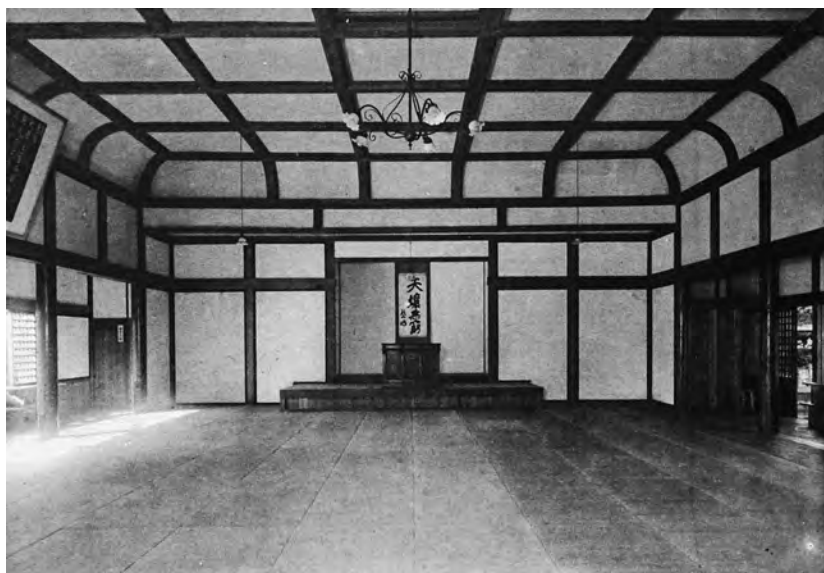
ちなみに、私の父間宮直香も国士館と縁があり、戦中で短期間のことであったと思われるが、国士館高等拓殖学校でマレー語を教授していたと家族から聞いている。父は戦中、外務省から海軍司政官としてインドネシアのボルネオに派遣され、終戦後三年経って帰国した。帰国後は千葉県立東葛飾高等学校で教師を勤め、退職後はもっぱらインドネシア文学の翻訳をしていた。

ある日、先生から「今日は靴の配給がある。一組につき三足である」、一学級四、五〇人の中から三人が当たるわけだ。私もどうしても当てたかった。靴底は破れ、歩くのにも不便を感じていたからだ。といっても、物資不足の時代、そう簡単には買えるものではなかった。

靴といっても布で出来た編上げ靴である。でも、当たった三人は歓喜した。はずれた他の生徒の表情は暗かった。

私が二年生になった昭和一八年頃、制服が変わったような気がする。

藁のようなガサガサした生地で作られ、カーキ色一色



大講堂内部（昭和18年3月 中学校卒業アルバムより）

の国民服、カバンはランドセル風で背中に背負っての通学だった。もちろんゲートルを巻いてである。

学校にもようやく慣れた頃、優勢だった日本軍は各地で敗北、米軍の空爆は日増しに激しくなってきた。勉強どころではなくなってきたのである。

勤労動員が下ったのはその頃だった。勤労動員が始まってからの記憶は曖昧ではっきりしない部分も多いが、学校に集合してから生徒一同隊列を組んで工場へ向ったのは覚えている。工場での作業終了後に、空爆により電車が全線ストップした時もあり、その時は全員で「必勝」の鉢巻きをして三三五五歩いて帰宅したこともあった。勤労動員は週に三日間くらいで、残りの数日は学習であった。

我々の組が派遣されたのは小田急線「狛江」駅からほど近い「トモエ工場」だった。そこには若い工員さんにまじって、多くの兵隊さんたちが働いていた。慣れない手つきで旋盤を操作したが、作られた物がなんであったか、今でもわからない。

しばらくして、兵隊さんたちの姿はなくなった。南方の激戦地へ送られたのだらうという噂が流れた。

その頃、艦載機から飛び立った米軍機が「トモエ工場」の上空に飛来するようになった。猛烈な機銃掃射も

うけたが、幸いに生徒からは一人の怪我人も出なかった。

ただ、迎えうつ日本機は一機もなく、なすまにされた悔しさは今でも残っている。

こうした戦争のまっただなか、勉強だけは厳しくやっ
たつもりでいる。

ほとんどの校舎が焼け落ち、焼け残ったひとつが「大講堂」である。

振り返った屋根は瓦でお、われ、歴史ある著名なお寺のような建物だった。入学当時に大講堂を見た時、その威風堂々とした風体に圧倒され、果たして我々が内部に入れるのかと思ったほど、神聖な場所に見えた。かつて、この大講堂で、私たち生徒はびっしり敷かれた畳の上に正座して、徳富蘇峰先生、中野正剛先生といった大物政治家のお話を拝聴した記憶がある。真白い頭髪を耳まで下げ、静かな口調でお話をされた蘇峰先生のお姿が今でも印象に残っている。

話はそれるが、その大講堂で国語の試験があった。私は紙にかいたアンチョコを畳と畳の間に差し込み、それを見て答案用紙に書きこんだ覚えがある。今では笑って云えるが、当時はまさに恐怖の一瞬であった。

忘れられないのが友人たちである。そして、当時、皆で歌った国士館にまつわる創り歌である。

「誠意、勤労、見識、気魄、これが天下の国士館、よ
おい、よおい国士館」

「目黒川のすぐそばに、校舎も汚い国士館、ツンツン、国士館のすぐそばに、流れも汚い目黒川、ツンツン」

皆で大きな声で歌った「ツンツン節」、まるで昨日のような気がしてならない。

今でも桜の時期、目黒川の話がでると、つい口ずさんでしまう。この原稿を執筆しながらも、口ずさんでしまった。懐かしい。

将来の日本を語りあった同級生の皆さん、そして、共にラッパを吹奏した今村君、戸谷君、森君、境君、いま、どうしておられるだろうか。お元気だろうか。

国士館中学校時代の思い出話を一堂に集って語りあいたい。

私はいつも、そう思っている。

了